

# 京鹿子

昭和四年二月一日發行  
第百一十七〇号二月十一日發行



2月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その七十七



大年の風の紡ぐは未<sup>あ</sup>来<sup>す</sup>の夢  
登音に胸の高鳴りポインセチア  
里の家の仄かな灯り山眠る  
洛中へ獣の惑ひ山眠る  
除夜飾る夢いちりんの花の文  
煩惱の思考を閉ざす寒の鯉

冬蜂の日和見峠策尽きる  
里人と和議を結べずかじけ猿  
煤逃げの夫へ代案押しつける  
寒波くる只<sup>ひたすら</sup>管動くやじろべゑ

歳晚吟行

神丘の神のまろび寝冬日さす  
冬帝の南下よもやの都攻め  
手相見のあえかな陰り年の暮  
二枚目のトーストの焦げ雪もよひ

—  
近詠  
—

和田 照海



綿虫日和

甲冑に姫のものあり島しぐれ  
一島は綿虫日和嫁ばなし  
留守宮に浪音ばかりして暮るる  
幾度もとびしましぐれ野風呂岬  
しぐるるや埴輪の口の丸きこゑ

—  
近詠  
—

松本 鷹根



年酒酌む

乾杯で称ふ年の瀬燃ゆ入日  
更け始む帰路の湖風虎落笛  
寒水に老いを浄めて神の前  
積もる嵩更に散り維ぐ落葉杜  
夕映の彼方は故郷年酒酌む

塩貝 朱千



閑ひゆるり

さんざめく少女ら風の白山茶花  
晩節の刻ゆるやかにしぐれ虹  
胸に棲む人また殖やし銀尾花  
父よ母よ閑ひゆるり吹く夜は  
漆黒の深き手ざはり千鳥鳴く

英華採集

6Bで交はず筆談冬兆す  
今やコロナの話題はオミクロンという不透明な物に変化しているが、依然として病院への見舞等の面会が出来ない状況の中で硝子越しであれば可能な場合があるようだ。掲句は様々な場面が想定されるが6Bの非常に濃い鉛筆を使つての筆談は、識別する患者さんの目の視力の程度或いは患者さんとの距離の遠さ等の不自由さが考えられる。季語の「冬兆す」には病状の深刻さ不安などの精神的な思いが吐露されている。

後ろ手の障子に残す悔い一つ  
人間社会で普通に暮らしていくには人と人との接触なしでは考えられない。そこに人間同士の軋轢が必ず生まれることになるが、それは他人、家族、夫婦間を問わず同じであると言える。掲句は、「障子」という「物」を使つて人間の心理的な感情の動きを巧みに表現している。障子の閉め方にルールは無いものの後ろ手で閉める行為には、今しがた部屋で起きた事に対しての怒り動揺が表れているのではないか。勇んで部屋を出てきた反省が悔いである。

秋風を切るスケボーの着地音  
昨年の夏の東京五輪で一躍話題に上がった「スケボー」の競技は、各地で若い世代へさらにブームを起こす切っ掛けとなったのではないだろうか。東京五輪では、年代を問わず少年少女のダイナミックな動きに感動を覚え声援を送ったのが昨日のように感じる。その感動があるからこそ身近に見るスケボーにも関心を寄せ句材の対象となつていく。季語の「秋風を切る」には興奮冷めやらぬ作者の思いが感じられる。

蠟梅 沼田巴字

寒鴉何を求めて鳴き散らす  
降る雪や漱石全集熟読す  
己を知ることの楽しさ老の春  
春風邪を語りて女生生し  
蠟梅の一花一花に仏棲み

年の暮 植村蘇星

人は皆師なり生かされ年の暮  
合ふ合はぬ合はす心の年の暮  
天の声地の声共助年の暮  
何時の世も起伏これあり年の暮  
生かされて生きて社恩の年の暮

ひとりごと 北川孝子

春迎ふ鏡の中は背のびして  
年あらた公園横の深呼吸  
人生の通過点すぎ春の東風  
寒の東風まむかえば湧く底ぢから  
白菜の繋りゆく夜のひとりごと

返り花 直江裕子

ひょうろりと身めぐりに咲く返り花  
小春日のガラスが好きで淋しくて  
言葉さへ要らなくなるか神無月  
たまゆらの菊の香ゆれて客のくる  
安寧の日ざしやはらか柿を干す

新暦 高木晶子

柿の秋力加減の俵曳  
薄紅葉料理のやうに壺並べ  
しるべ石色の褪せゆく式部の実  
木瓜の実の落つるままにし禅の庭  
新暦バトンリレーをして貰ふ

冬雷 伊藤希眸

霜月をほがひに過ごす京一と日  
ことぶれや紙三枚の暖かさ  
時雨くる大路の並木洗ひ去る  
コロナ禍もやがて淡墨実千両  
冬雷のバリッと一音日付け替ふ

散文的 奥田筆子

紅葉燃ゆ季節はづれの情熱よ  
いてふ黄葉黄金の音にきらめけり  
天才にピアノを貸して駅夜長  
ちらほらとイスラム化して葱畑  
柿落葉散文的に家事をして

芹の水 井上菜摘子

ふくろふや相想ふ闇ぬれてをり  
手から手の赤ちゃん匂ふ雪晴れて  
きさらぎの水通しけり身の真中  
あの転機より雪ふれば雪にほふ  
生き足りるまでのみちのり芹の水

# 神麓集

初音 村田あを衣

追憶をつなぐフィルム初山河  
雪ぼたる追へば風聞滲ませて  
綿虫へこころ潤ませ母忌日  
鳥帰る鏡の奥の濡れてゐる  
句読点打ち違へつつ初音かな

国一撲 山中志津子

皇室の重きしきたり今年米  
穂芒の地球の傷を癒し得ず  
神鷄の競ひ鳴きする杜小春  
小春蝶方程式の恋をして  
国一揆の狼煙遠ち近ち冬に入る

青空色 井尻妙子

探梅や青空色に爪染めて  
冬木に芽つくづく一人てふ暮し  
振り返るたび巻き直すマフラーの真っ赤  
安否確認さざんくわの垣根越し  
酸茎樽賀茂に田の姓池の姓

霜の夜 鷺山珀眉

霜の夜のおしやれ語りの序章かな  
コニヤックのグラスの香り秋深む  
朝寒の色傘ひとつ常夜灯  
宇宙波のひとしきり寄すコスモス野  
葛の葉のかさなる翳の重さかな

水澄めり 亀井福恵

火伏せなる神を斎きて水澄めり  
芒原風になりたきもの光る  
鰯雲己が重さに聳つクレーン  
石榴熟れうっかり本音零しけり  
首塚や風の落葉が裏がへる

数珠玉 菊池和子

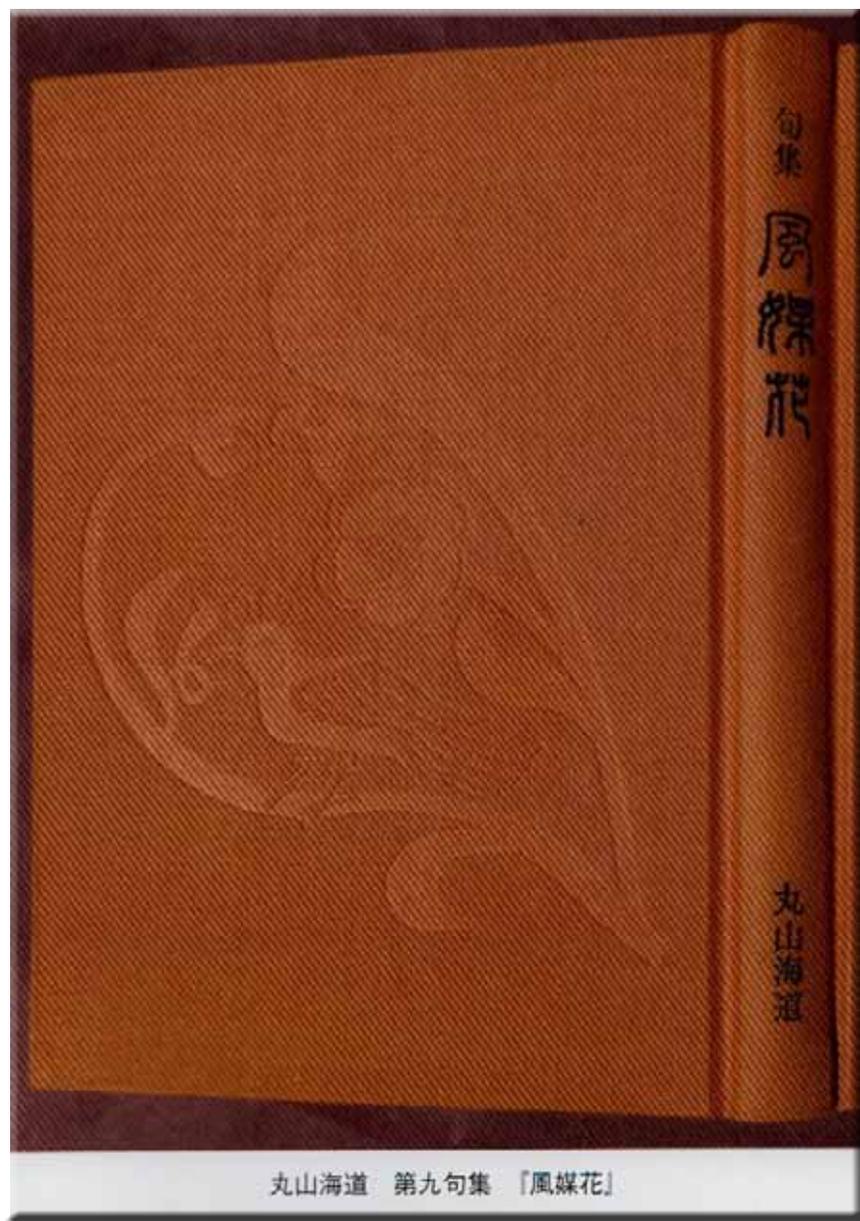
数珠玉の糸をほぐして君探す  
追憶の声よび覚ます栗の飯  
昨夜の修羅ほどく夜明けの虫合唱  
ささやかな生涯のゆれ落し文  
女郎花風のうなじのしなやかに

落人村 西村白杼

帰り花恋しき人の好きな藍  
甘んじて脇役通す大根かな  
金平糖舌にころがす小春かな  
寂寥や釣瓶落しの落人村  
晩年は昭和の遠くなる師走

秋のこ糸 安田優歌

森の底せせらぎと言ふ秋のこ糸  
散骨の話に途切れ小夜しぐれ  
枝折戸を幽けくたく初しぐれ  
古びたる葺の軋みや秋のこ糸  
遠ざかる釣瓶落しの君が面



風 岬 本郷 公子

鳥渡る海光淡き風岬  
影を脱ぐ安堵の風や夕芒  
破れ案山子星と身の上ばなしせむ  
瓢の笛少年は吹く父へ吹く  
雲一朵案山子孤愁の夕日影

今朝の冬 石原孝人

古きほど美しき追憶冬牡丹  
手に掬ふ水の硬さや今朝の冬  
峰里や人恋ふ色の冬灯  
大注連縄選り抜き藁にある矜恃  
冬耕や錆色深き電気柵





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

6Bで交はず筆談冬兆す

一所なる托鉢僧に風花す

馬の合ふ絆たのしもおでん酒

気負ふものなき一碗の葦雜炊

後ろ手の障子に残す悔い一つ

人形の眼醒む初霜のこゑ

冬蝶の黙とほす哲学の道

空魚籠を提げ行く人や浜焚火

秋風を切るスケボーの着地音

色褪せぬ大和心や月今宵

東京 福島 照子

京都 中村倚久子

福山 藤井 晴子

秋の野の風の果てなる白燈台

集ふれば老いを肴の温め酒

時差数へ返信メール小春の日

紅葉の京を尋ねて本題に

秋夜長偉人の手記に我が意得る

稲刈や体験の子の好奇心

紫の味噛みしめる菊の花

剥きし柿吊されてゐる青き窓

秋晴れの選挙カーのみ音高し

街角の信号青し蔦紅葉

アソチ 伊吹 之博

酒田 藤波 松山